



(浜松2万5千分の1)

静岡・梶子遺跡 (国鉄浜松工場内)

- 1 所在地 浜松市南伊場町四丁目(小字梶子)
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)五月～二月
- 3 調査機関 浜松市教育委員会
- 4 調査担当者 漆畑 敏・太田好治
- 5 遺跡の種類 郡衙跡?
- 6 遺跡の時代 奈良時代(八世紀後半)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地点は、国鉄浜松工場敷地内にあり、従来より工場内遺跡と呼ばれていた範囲の北西隅の梶子という地点にあたる。南へ三〇〇

mの所には、具注暦木簡(天平元年?)や唐三彩の陶枕を出土した城山遺跡があり、南東には、伊場遺跡が隣接して立地する。

梶子遺跡は、堤列間湿地内の微高地(標高約〇・八m)に、営まれたものと推定される。今回の調査は、工場

内遺跡に新設される建物の範囲(一七七四²/₃m)に限られ、遺跡全体を調査したものではない。調査区が微高地の縁辺部にあったため、「居住地」(微高地)は、幅約一〇m、長さ約五〇mを検出したに過ぎない。この微高地上の平坦面で、掘立柱遺構の柱穴と推定される小穴を、約二〇箇所検出した。しかし、遺構検出面が幅一〇mと狭いこともあって、掘立柱遺構と断定できる小穴群は、抽出できなかった。

この段丘状微高地の縁に沿うように、幅約一m、深さ〇・五m程の小溝が二条検出された。このうち、内側の溝(微高地寄り)には、杭列や、小規模ではあるが、貝塚などが検出され「生活」の痕跡が窺えた。木簡はこの小溝の覆土中より発見された。溝底面からは、古墳時代終末期(七世紀後半)の須恵器が出土し、溝の初期のものと考えている。貝塚は、溝の上層部で検出され、周辺から出土した須恵器の年代から八世紀中葉から後葉にかけて形成された貝塚と考えられる。溝の幅も狭く、浅いため、溝覆土の分層に、やや疑点が残るが、これら木簡も貝塚形成期と同時期のものと考えている。他に遺物としては、曲物、馬形、舟形、陶馬、手捏土器等が出土している。

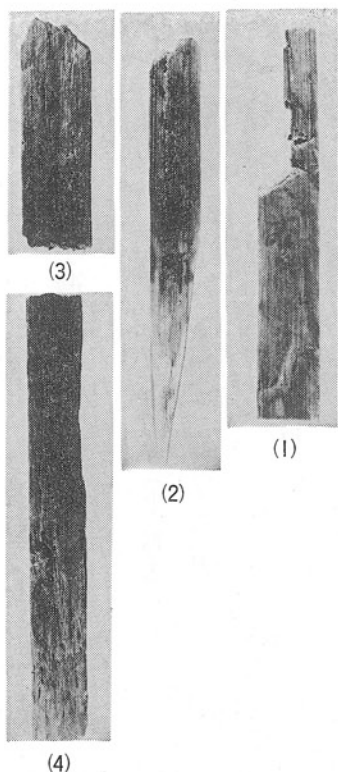
今回は、段丘状微高地の縁辺部を、僅かに調査しただけである。しかし遺跡の中心部と考えられる。調査区の南側は、伊場遺跡から西方へ続くであろう「大溝」を介して、城山遺跡(遠江国敷智郡衙跡?)の対岸にあたる位置となる。したがって立地としては、城山遺

跡と有機的な関係も想定させる。

8 木簡の釈文・内容

出土点数が少ないことや(3)(4)は、同一個体と思われる(1)判読出来ない部分が多く、直接年紀の知れる部分もない点など、木簡からこの遺構や遺跡の性格を知り得るものではない。

- | | | | |
|-----|--|------------|-----|
| (1) | 「 $\square \times \square$ 万呂 $\square$ 」 | 150×19×5 | 011 |
| (2) | 「 $\square$ 竹カ
田宗我マ薬師」 | 173×20×6 | 051 |
| (3) | 「 $\square$ 」 | (90)×27×6 | 081 |
| (4) | 「 $\square \square \square$ 廣万呂 $\square \square \square$ 」
〔二石カ〕 | (182)×23×6 | 019 |
| | (漆畑 敏) | | |



木簡研究 第三号

巻頭言——中国簡牘呼称についての提言——

大庭 脩

一九八〇年出土の木簡

- 概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京) 五条五坊七坪 藤原宮跡 稗田遺跡——下ッ道—— 長岡京跡 大蔵司遺跡 西沖遺跡 御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 桜町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御着城跡 鵜・城山遺跡 草戸千軒町遺跡 野町地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡東辺部

一九七七年以前出土の木簡 (三)

- 平城宮跡(第二一次・第二二次北) 薬師寺 下岡田遺跡
中国における簡牘研究の位相 池田 温
庸米付札について 狩野 久
静岡県城山遺跡出土の具注曆木簡について 原 秀三郎
草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心に—— 志田原重人
彙報

頒価 三五〇〇円 二四〇〇円